気になる子どもに関わる保育者に対する個別的双方向支援（Ⅰ）
―保育者へのアンケートから見えること―

矢野　洋子[*1]・田中　敏明[*2]・松本　禎明[*1]・安東　綾子[*3]・小川　耕平[*4]
[*1]九州女子短期大学子ども健康学科　北九州市八幡西区自由ケ丘1-1（〒807-8586）
[*2]豊岡短期大学通信教育部こども学科　兵庫県豊岡市戸牧（〒668-8580）
[*3]梅光学院大学子ども学部子ども未来学科　山口県下関市向洋町1-1-1（〒750-8511）
[*4]富山福祉短期大学幼児教育学科　富山県射水市三ケ579（〒939-0341）
（2023年11月6日受付、2024年1月19日受理）

要　旨

保育所・幼稚園・認定こども園等の保育現場において、集団に入れない・指示が通らない・子ども同士のトラブルが頻回に起こる・発達の遅れがみられるなどの「気になる子ども」が増加している。筆者らは、令和4年度より科学研究費助成事業として「気になる子どもに関わる保育者に対する個別的双方向支援」という研究課題で研究を行っている。そのプレ調査として2023年1月に、保育者へのアンケート調査を行った。その結果、調査対象者が勤務するすべての園のうち約82,0％に気になる子どもが存在しているが、83,0％には加配の職員がおらず、専門的なアドバイスの必要性や負担感を感じている保育者が8割近いことが明らかになった。その結果から、今後、個別の子どもの状況に応じた個別支援計画や個別指導計画の作成、ケア会議に基づいた具体的な支援方法の理解や保護者への対応など、保育者に対する専門的なアドバイスの必要性が明らかになった。

キーワード：　気になる子ども　　個別的双方向支援　　個別支援計画　　個別指導計画

1．はじめに

保育所・認定こども園・幼稚園等の保育現場において、障害児保育は様々な形式や方法で行われてきていた。そこでは保育者と子どもの関係性に注目した「関係性の構築」を主眼においた保育・教育が中心に行われてきた。特に「集団に入れない」「指示が通らない」「友達とトラブルが多い」「発達の遅れがみられる」などの、保育者から見て他の子どもたちとは違いがある子どもたちは「気になる子ども」と表現されて今日に至っている。ただ「気になる子ども」には様々なタイプの「気になる」子どもが含まれており、正式な定義はされていないままである。2005年に「発達障害者支援法」が施行され、多様な障害の種別が提示され、早期発見の重要性が強調された。さらに、2008年には「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」が改訂され、障害のある子どもへの個別対応が求められるようになった。そこでは知的障害や自閉スペクトラム症など明らかに発達に課題を抱える子どもたちをいかに早期発見して「療育につなぐか」という「ゴール」が求められ、保育現場においては、個別の状態に応じてどのような保育をしていくかということが課題となった。研修会も数多く開かれ、保育士や教員の障害に関する理論や専門用語の知識は積み上げられてきている。その一方で、明らかに障害のある子どもたちに加えて、10年ほど前からはっきりとした障害の有無が判別できないにもかかわらず、「教室にじっとしていない」「すぐに切れてパニックになる」「友だちとの関係が難しい」など、いわゆるボーダーラインの子どもが増加している。保育所や認定こども園においては、子育て支援の観点から、多様な子どもたちの積極的な受け入れが推奨され、幼稚園でも預かり保育、未満児保育が拡充する中で、保育者の困り感や悩みは増加する一方となっている。

保育現場でよく耳にする保育士や教員の悩みとして、①クラスの中に気になる子どもがたくさんいる、②自治体の巡回相談はなかなか順番が回ってこないし、少しの時間では詳細な相談が難しい、③研修会などで、理論的な学びはできても実際に目の前にいる子どもたちの行動について、どのように対応してよいのかがわからないし、対応策がうまくいかない、④保護者の理解が得られないという４点が多い。これ以外にも、特別支援教育の知識の不足などから、個別の支援計画の作成方法、個別の支援計画とクラスの支援計画の関係

性、個々のケースに応じた対応とクラスの運営とをどのように並立させていくかなどの悩みも少なくない。

特別支援教育に関する研修は増加しているが、研修の対象が一部の保育者に限定され、すべての保育者に行き渡らないこと、研修内容が一般論に限られ、保育者が抱える個々の子どもに対応させにくいこと、ほとんどの研修は、講師からの一方通行の形で行われ、保育者の疑問に応えたり、子どもに対する支援の結果を受けて適切な助言が行われるような双方向的な保育者支援になっていないことなど、研修内容や方法に関する課題も少なくない。その結果、「研修を受けてもうまくいかない」ことが悩みとなり、悩みを抱える保育者は疲弊し、クラス全体の保育に支障をきたしたり、早期離職の原因の一つにもなっている。

このことから、「気になる子ども」を保育している保育者の具体的困り感に基づいた双方向的な支援（オンラインを活用した支援を含む）の方法を確立するとともに、支援の有効性を検証することが求められる。保育者や教員にとって有効な研修を構築していくために、近隣の園や学生からの実習報告だけでなく、より広範囲の保育所・認定子ども園・幼稚園を対象とした気になる子どもに関する実態調査を行い、保育者の抱える困り感やニーズを明らかにすることを目的とする。

2. 研究の方法

（1）調査対象

九州内の主要保育協会並びに幼稚園連盟に打診、研究趣旨に沿った調査が可能な施設の紹介を受け、その中で承諾の得られた19施設の施設長から承諾の得られた19施設を調査対象とした。

（2）調査期間

2022年12月～ 2023年1月にアンケートを郵送し回答を依頼した。

（3）アンケート内容

アンケートの内容は以下の通りである。

1．年代についてお答えください。

a, 20歳代　b, 30歳代　c, 40歳代　d, 50歳代　e, 60歳代以上

2．性別についてお答えください。

a,女性　b,男性　c,回答したくない

3．あなたの職種に要する資格をお答えください。

a, 保育士　b,幼稚園教諭　c,保育教諭　d,看護師　e,その他

4．勤務年数についてお答えください。

a, 0 ～ 1年未満　b, 3年未満　c, 3 ～ 5年未満　d, 6 ～ 10年未満　e, 10 ～ 20年未満　f, 20年以上

5．勤務形態についてお答えください。

a,正規職員　b,非正規職員（担任）　c,非正規職員（担任なし）

6．現在自分のクラスに気になる子どもはいますか。（「はい」の場合は、以下質問７～１８までお答えください。）

はい　いいえ

7．クラスの何人中何人、気になる子どもがいますか。

8．気になる子どもに加配の職員はいますか？

はい　いいえ

9．どんなところが気になりますか？（複数回答可）

a,教室を飛び出す　b,集団行動ができない　c,パニック・癇癪をおこす　d,ことばが遅いe,発達が遅い
f,友達とトラブルが多い　g,その他

10．上記（質問９）の行動の原因は何だと思いますか。（複数回答可）

a,発達の障害　b,家庭環境（虐待も含む）c,わからない　d,その他

11．気になる子どもについて、発達のチェックを行っていますか。

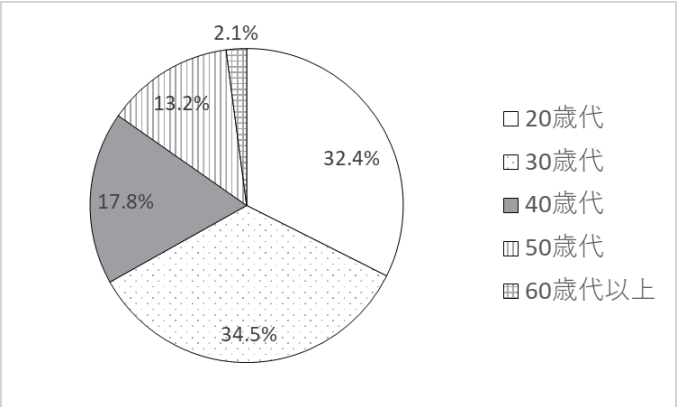
はい　いいえ

12．発達チェックを行っている場合は何を使用していますか。

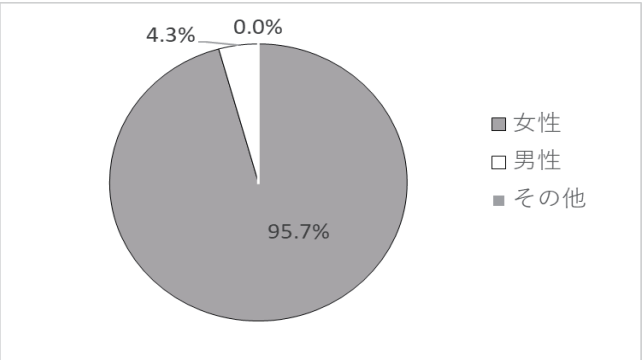
13. 気になる子どもについて職員間で情報共有できていると思いますか。
はい　いいえ
14. その情報共有は役に立っていますか。
はい　いいえ
15. 気なる子どもについて専門的なアドバイスを受けていると感じますか。
はい　いいえ
16. 気になる子どもがクラスにいる負担感を感じていますか。
a,非常に感じている　b,やや感じている　c,感じていない
17. 上記（質問16）である理由を書いてください。
18. 気になる子どもについて、困っていることを具体的に書いてください。

（４）倫理的配慮
アンケートにおいて知り得た情報など、個人情報の保護には最大限配慮を行った。個人が特定できないように十分配慮を行った。
※調査用紙の配布にあたっては、幼稚園、保育所、認定こども園において紙面及び口頭で調査の目的と趣旨を説明し、回答するかどうかは任意であること、回答者名の記入は不要であること、回答したくない設問は回答しなくてよいこと、個別の回答を公開しないこと、所属園及び他園の職員が回答を見ることはないことを説明し、回答を承諾した保育者に回答を依頼した。

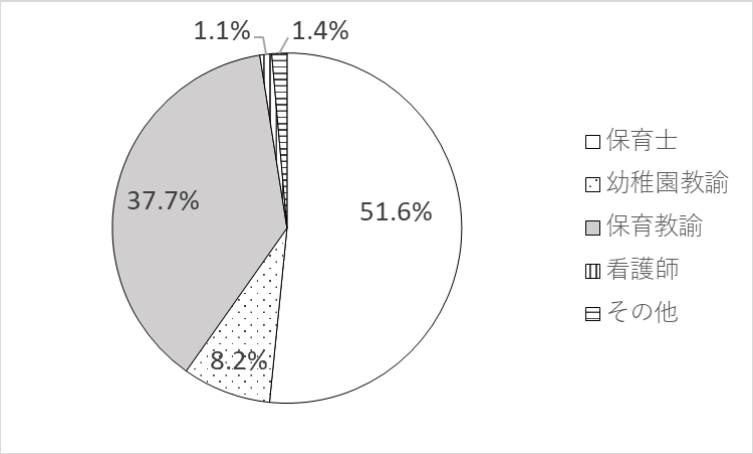
３．結果と考察
281件の回答を得た。回答者の年代・性別・資格・勤務年数・勤務形態については図Ⅰ-１～５に示す通りである。20代が一番多く30代と合わせると、7割を超え、回答者は比較的若い世代が多い。



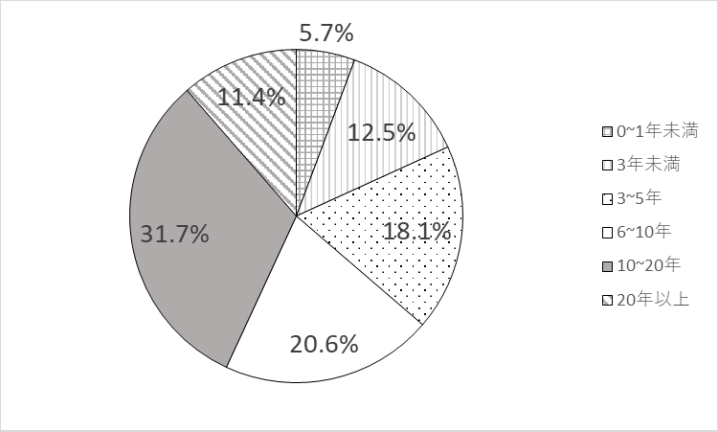
図Ⅰ-１　保育者の年齢別分布



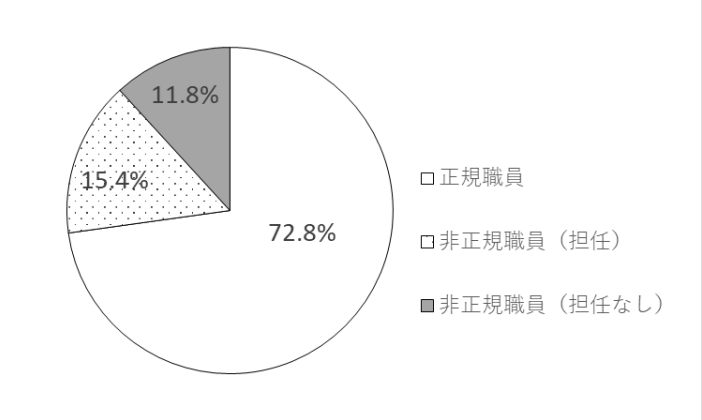
図Ⅰ-２　保育者の性別の割合



図Ⅰ-３　保育者の保有資格



図Ⅰ-４　保育者の勤務年数



図Ⅰ-５　保育者の勤務の形態

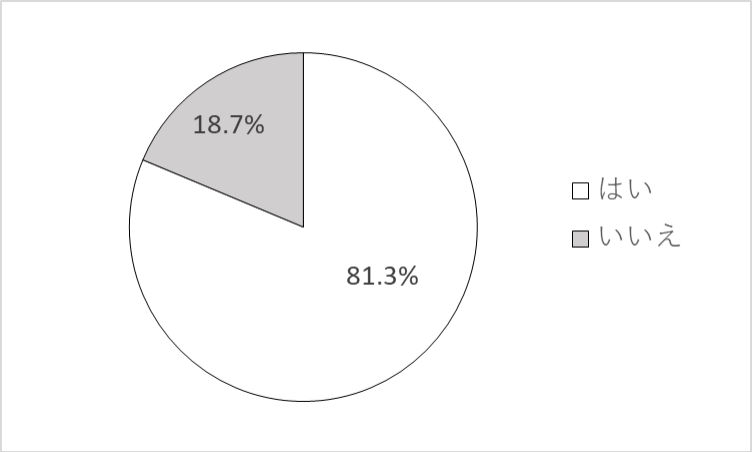
（１）気になる子ども、加配職員の有無について

気になる子ども・加配職員の有無については図Ⅱ－１・２に示す。

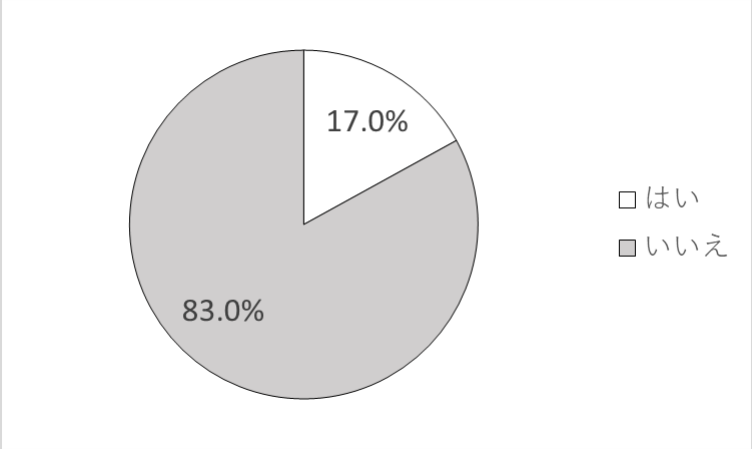
回答者の81,3％が現在自分のクラスに「気になる子ども」がいると答えている。その子どもたちに対して全体の83,0％で加配の職員がいない状態である。クラスの人数や職員数に違いがあるため、一概には言えないが、担任に対して重い負担がかかっていることが推察される。また「気になる子ども」であっても保

護者の同意がないと、専門機関への相談や診断がされていないケースも多いことが推察され、気になる子どもがいる場合は加配が望ましいが、人件費の関係から難しいという現実がある。また加配の職員は必ずしも「気になる子ども」の専門性が高いというわけではない。

クラスに気になる子どもや手のかかる子どもが多い場合には、専門的な立場で保育ができないことも多いのではないかと思われる。



図Ⅱ- 1　クラスの気になる子どもの存在



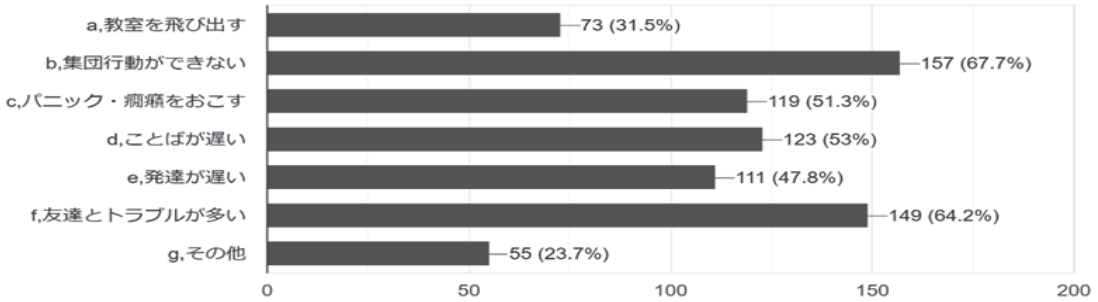
図Ⅱ- 2　気になる子どもへの加配職員の有無

（2）気になる子どもの「気になる」内容・その原因・発達チェックについて

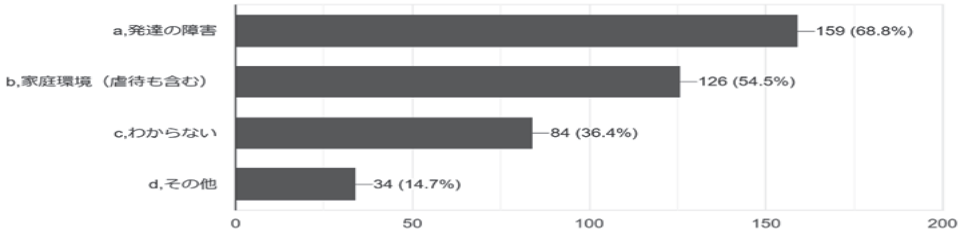
回答内容は図Ⅲ－１・２・３に示す。「集団行動ができない」が67,7％と最も多く、ついで「友達とのトラブル」（64,2％）である。また「パニック･かんしゃくを起こす」（51,3％）「教室を飛び出す」（31,5％）と、集団での保育に支障が出るという内容が多い。教室を飛び出すような場合は、危機管理の面からもクラスの保育と出ていった子どもの見守りなど、1人担任では物理的に困難であるとこが推察される。また友達とのトラブルなども、保育者の対応が必要であり、大きな課題の1つであると言えよう。また「言葉が遅い」（53,0％）「発達が遅い」（47,8％）という発達の問題も半数前後ある。このような行動の原因として、「発達の問題」が68,8％と最も多く、ついで「家庭環境（虐待も含む）」が54,5％と拮抗している。しかし家庭環境、とくに虐待は発達の問題を生じさせることも指摘されており（友田2017）、この関連についてはこの回答からだけでは結論付けられないが、家庭環境を中心とした視点を持って「気になる子ども」を考えていくことは重要なポイントとなる。

また「気になる子ども」について発達のチェックを園内で行っているのは30,9％であり、保護者の同意を得られず専門機関へつなぐことができない場合は、子どもの発達の状態把握も保育者の主観に頼っていることが多いものと推察される。発達の遅れについても、障害から起因するものなのか、家庭環境等からのも

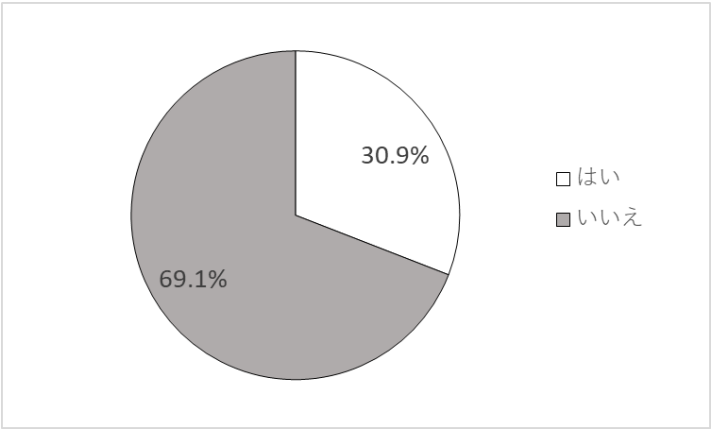
のなのかなどその原因によってアプローチの方法には違いがある。園長の許可などを得られれば、保育者の観察による発達チェックを行うことは、子どもの行動の原因を明らかにする意味においても必要ではないかと考えられる。



図Ⅲ-1　気になる子どもの具体的な行動



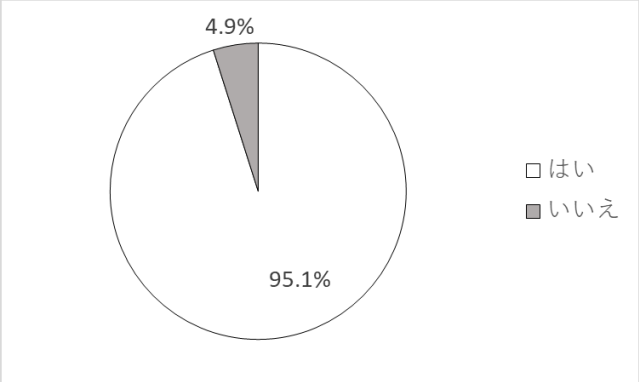
図Ⅲ-2　保育者が考える気になる子どもの行動の原因



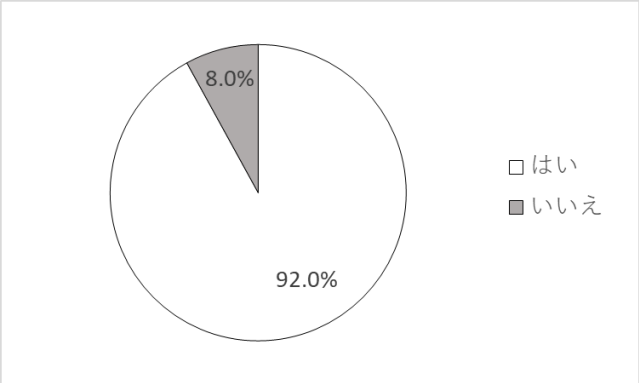
図Ⅲ-3　保育者が行う発達チェックの状況

（3）気になる子どもの情報共有について

「気になる子ども」についての情報共有については、図Ⅳ―１・２に示す。回答者の95,1％が職員間で情報共有できていると回答しており、92,0％はその情報は役に立っていると回答している。情報共有については、職員会議なのか、ケア会議なのか、保育者間の立ち話なのか、クラス担当者間のものかを細分化していく必要がある。最終的には園全体で子どもの情報を把握して、支援について支援計画や指導計画を立てて実践していくことが必要である。そのための園内のシステムの構築をどのように行うかが課題であると思われる。



図Ⅳ-1　気になる子どもについての情報共有の状況

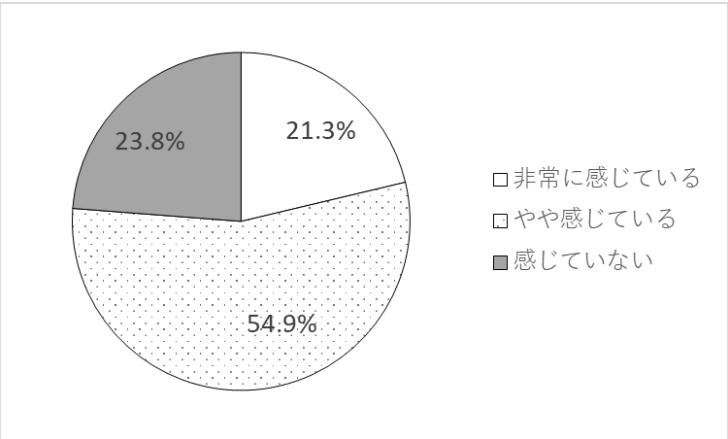


図Ⅳ-2　情報共有の保育者への役立ち度合い

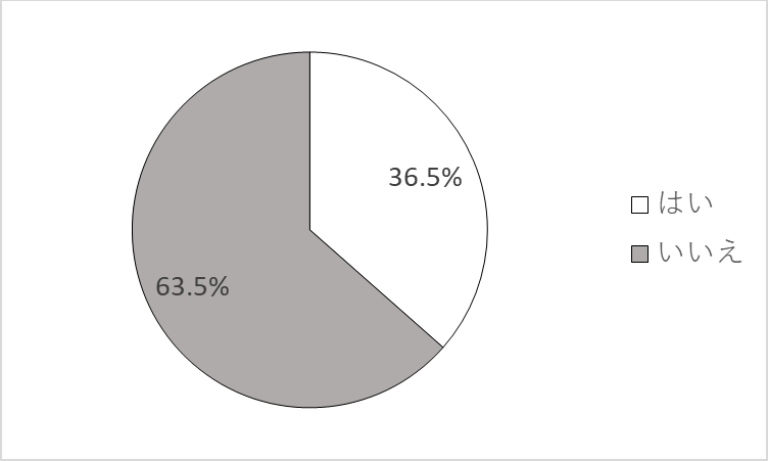
（４）気になる子どもへの負担感等

図Ⅴ－１は「気になる子ども」への負担感等について示したものである。上記のように、情報共有を行っているが、63,6％は「専門的なアドバイスを受けていると感じない」（図Ⅴ－２）と回答している。さらに76,3％は「気になる子ども」がクラスにいる負担感を感じている。

情報共有から専門的なアドバイス、つまり具体的な支援方法についてアドバイスを得られていないことや巡回相談などの機会が少なかったりすることから、具体的な支援方法がわからない状態であると推察され、個々の子どもに関して具体的な支援方法のアドバイスを継続的に行い、支援について見直していくというPDCAサイクルをいかにして構築していくかも今後の課題であると言えよう。



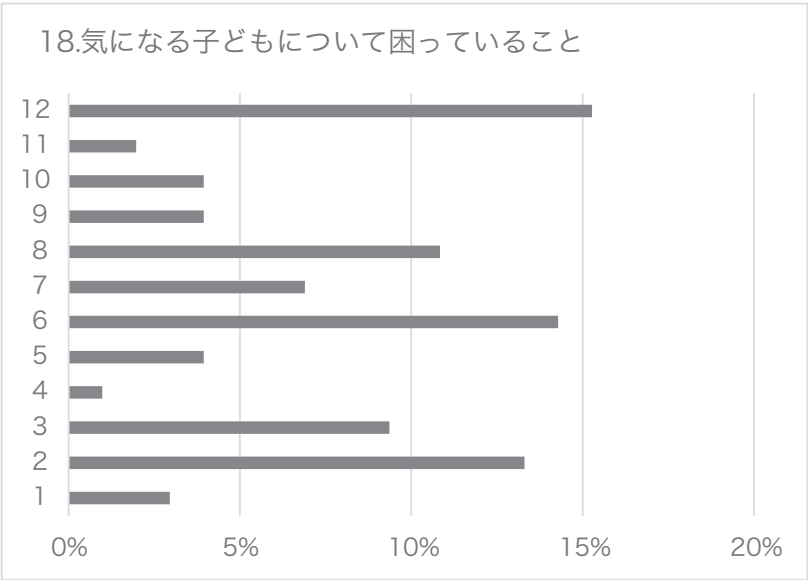
図Ⅴ-1　気になる子どもを持つ負担感



図Ⅴ-2　気になる子どもに関するアドバイスを受けている状況

（5）「気になる子どもについて困っていること

図Ⅵは、自由記述された「困っている内容」を１.保育室を飛び出す　２.集団行動ができない　３.パニックや癇癪を起す　４.言葉が遅い　５.発達が遅い　６.友達とのトラブル　７.保護者が理解しない　８.指示が理解できない　９.こだわりが強い　10.職員の不足　11.落ち着かない　12.その他　の12のカテゴリに分けて、集約したものである。この結果を見ると、保育者の困り感が具体的に伝わってくる。具体的な記述を表1に示す。この結果からも、保育者の困り感があらわれている。このような困り感に直接的に答えることのできる研修の必要性が示唆される。



１．保育室を飛び出す
２．集団行動できない
３．パニックや癇癪をおこす
４．言葉が遅い
５．発達が遅い
６．友達とのトラブル
７．保護者が理解しない
８．指示が理解できない
９．こだわりが強い
10．職員の不足
11・落ち着かない
12．その他

図Ⅵ　気になる子どもについて困っていること

表１　保育者の困り感の具体的なエピソード

・担任の話を聞かない。すぐに部屋から飛び出す。イタズラを注意してもまたすぐ繰り返す。友達を叩くなど、暴力をふるう。注意すると逆ギレする。会話が聞きとりづらい。
・集団行動が出来ない　・キレやすさ　おもらし
・他児への危害を加える。集団行動ができない。わざと危ない行動をとる
・気持ちの切り替えができず癇癪を起こし、壁に自分の頭を激しくぶつけるなど自傷行為が見られる。
・他人を攻撃する。パーソナルスペースが狭く、絵本を読む時でさえ相手の手が近くにあるだけで叩く。離れるように促すが頑なに動こうとせず泣き出す。場所を指定して他児から離すが、自ら動き中心に座る。
・思い通りにいかないと泣き続ける。気持ちの切り替えが上手くできない。
・常にお尻や足が動き落ち着かない。キックバイクに乗っていても、乗りながらジャンプをする。衝動的に動く。
・気になる特性があるが保護者に伝えても、上手く伝えられていない。
・担当する保育士（保育補助）が、その子の担当になる事を嫌がる、拒む
・家庭での生活リズムが常に乱れており、保護者も非協力的な為、眠たくなったり機嫌が悪くなったり、時々給食を食べる事が出来ず、昼過ぎに保護者に迎えに来てもらう必要があった。
・保育園に預けっぱなしがある。身だしなみや、荷物など園がどうにかしてくれるだろう感がひどいなぁと感じる。
・気になる＝性格なのか気分なのかサポートが必要なのかが私たち保育士では判断しかねる。
・手が回らないから、申し訳なく思う。クラスを上手くまとめれない時もある。

４．まとめと今後の課題

以上の結果は、先行研究にもあるように、保育現場において「気になる子ども」が増えており、保育者はその対応について困り感がとても高いという先行研究を裏付けるものである。

今回のアンケート結果から、保育者の困り感の背景には次の4つが主にあることが推測される。

（１）気になる子どもの状況（行動の意味や発達の問題など）を保育者が把握できていない

（２）様々な「気になる」行動について専門的なアドバイスが得られず具体的な対応の方法がわからない

（３）保育者の人手不足

（４）保護者の理解が得られない、保護者対応の難しさ

保護者への対応も子どもへの対応がうまくできなかったり、どのように接してよいかわからない保護者、子どもの発達などに関心が薄い保護者への対応など多岐にわたっている。園内だけでは対応が難しい時もあり、保護者対応を含めて検討していくことが必要である。

また職員会議やクラス内の申し合わせのみにとどまらない、この４点の解決につながる研修や、専門家を交えた定期的なケア会議の開催など「気になる子ども」に関する園のシステムの構築が早急に求められる。そのきっかけの一つとして、希望する園については当該園に実際に訪問し、保育者の話を聞き、子どもの様子を観察することから始め、保育者や関係職員と共に気になる行動の原因や具体的な支援方法について考える研修を実践していく必要性が示唆される。

５．謝辞

今回の調査研究にご協力いただいた保育関連の協会、連盟及び施設の皆様に甚大な謝意を表する。また、本研究はJSPS科研費基盤研究（C）JP22525108の助成を受けたものである。

６．参考・引用文献

１）福富昌城（2009）『ケアする人のケアを考える』花園大学社会福祉学部研究紀要　第17号　PP.54-57

２）L・Mブラマー　M・Lビンゲイ　森田明子（訳）（2005）『ケアする人だって不死身ではない』北大路書房

３）福山正治（2003）『感情を知る』ナカニシヤ出版
４）野口晃菜（2021）特別支援学級・特別支援学校での暴言・体罰はなぜ起こるのか-構造的問題を解決するために-Yahooニュース　https://news.yahoo.co.jp/byline/noguchiakina/20211110-00267376
５）矢野洋子　太田彩加　安東綾子（2022）『支援者への支援の必要性（Ⅰ）』 九州女子大学　学術情報センター研究紀要　5　93－102
６）文部科学省（2017）『発達障害を含む障害のある幼児児童生徒に対する教育支援体制整備ガイドライン』
７）文部科学省（2017）『発達障害者支援に関する行政評価・監視の結果（勧告）に基づく対応について』
８）小竹利夫　芳野正昭　矢野洋子　猪野善弘（編著）（2020）『障害のある子どもの保育・教育』 建帛
９）東田直樹（2010）『続・自閉症の僕が飛び跳ねる理由』エスコアール出版
10）岩﨑淳子　及川留美　他（2018）『教育課程・保育の計画と評価』 萌文書林
11）友田明美（2017）『子どもの脳を傷つける親たち』ＮＨＫ出版
12）鯨岡俊（2009）『障害児保育』 ミネルヴァ書房
13）L・Mブラマー　M・Lビンゲイ　森田明子（2005）『ケアする人だって不死身ではない』北大路書房
14）福山正治（2003）『感情を知る』ナカニシヤ出版
15）エヴァ・フェダー・キテイ（2010）『愛の労働あるいは依存と白澤社発行現代書館発売
16)高木芳子(2021)『「気になるこども」に関する研究動向』 人間発達学研究　第12号　103-111
17)矢野洋子・安東綾子（2022）『支援者への支援の必要性（Ⅱ）エピソードから支援者の困り感について考える』 九州女子大学紀要　第58巻第1号　73-82
18）鯨岡俊（2017）『「気になる子」から「配慮が必要な子」へ』 発達149　ミネルヴァ書房　1-6
19）片岡輝（2017）『子供の主体性と福祉の観点から「気になる子」を考える』 発達149　ミネルヴァ書房　13-17
20）赤木和重（2017）『「気になる子」の理解と保育』 発達149　ミネルヴァ書房　18-23
21）守巧（2017）『気になる子がいるクラスを多面的に考える』 発達149　ミネルヴァ書房　29-34
22）近藤直子（2016）『保護者とともに子どものステキさを見つける』 発達147　ミネルヴァ書房　20－25
23）本郷一夫他（2005）『保育の場における「気になる」子どもの保育支援に関する研究』東北大学大学院・教育ネットワーク研究室年報　第5号　15-32
24）若山飛鳥（2017）『「気になる」子ども研究の展開1982年から2016年まで』武庫川女子大学大学院教育学研究論集（12）　57-62
25）野村朋（2018）『「気になる子」の保育研究の歴史的変遷と今日的課題』保育学研究　56（3）　70-80
26）高木芳子（2021）『「気になる子ども」に関する研究動向–個別支援と参加の観点からの整理–』人間発達学研究　12　103-111

Individualized interactive support for caregivers involved with children of concern (I)
- What can be seen from the questionnaire to caregivers -

Yoko YANO[*1], Toshiaki TANAKA[*2], Yoshiaki MATSUMOTO[*1], Ayako ANDO[*3], Kohei OGAWA[*4]

[*1] Department of Childhood Care and Education, Kyushu Women's Junior College,
1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

[*2] Department of Children's Studies, Section of Correspondence Education, Toyooka Junior College,
Tomaki, Toyooka-shi, Hyogo 668-8580, Japan

[*3] Department of Children's Future, Faculty of Children's Studies, Baikogakuin University,
1-1-1, Kouyou-cho, Shimonoseki-shi, Yamaguchi 750-8511, Japan

[*4] Department of Early Childhood Education, Toyama College of Welfare Science,
579, Mika, Imizu-shi, Toyama 939-0341, Japan

Abstract

An increasing number of "children of concern" are being observed at nursery schools, kindergartens, and certified childcare centers, where they are unable to join groups, have difficulty following instructions, frequently get into trouble with other children, and have delays in their personal development. The research project "Individualized Interactive Support for Caregivers of Concerned Children" has been conducted by the authors as a Grant-in-Aid for Scientific Research since 2022. As preliminary research, a questionnaire survey of childcare providers was conducted in January 2023. The results revealed that approximately 82% of the children of concern are present, but 83% have no extra staff, and nearly 80% of the caregivers need professional advice or feeling a sense of burden. Based on the results of this study, it was noted that it is urgent and important for children' s development that caregivers be professionally advised on how to provide support according to each child' s situation, and that individual support plans and individual guidance plans be created, also that care conferences be held.

Keywords: Child of Concern　Individualized Interactive Support　Individualized Support Plan
Individualized Instructional Plan